

「商品撮影のためのライティング基礎講座」 別冊付録

STROBOX

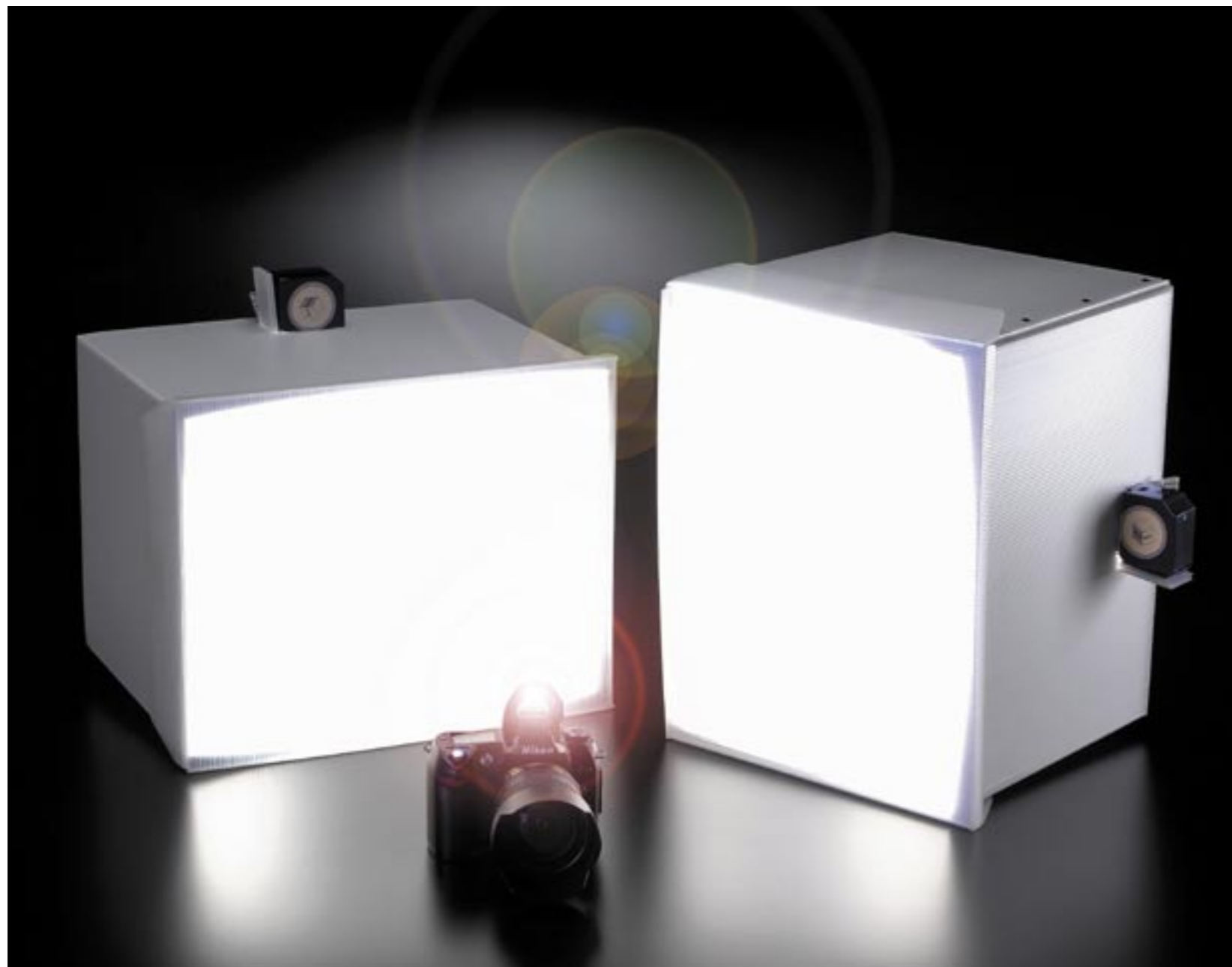
パターン・ライティング

Photo & Text 早川廣行



STRO BOXは通販で手に入る デジタルカメラに最適なボックス型の ユニークなストロボです

この冊子にはSTRO BOXの組み立てから撮影方法、さらに撮りたい写真のパターン・ライティングを掲載しました。すべての写真は実際にSTRO BOXを使って撮影されたものばかり。指示の通りにカメラとSTRO BOXを配置し、指定した絞り値で撮影すれば同じ写真を撮ることができます。この冊子をよくお読みいただき、STRO BOXを100%使いこなしてください。



「むずかしい」を簡単に、 そして、誰でも失敗なく撮れる

フィルムカメラ時代のストロボ撮影は正にプロの仕事領域でした。モデリングランプを頼りにストロボをセッティングすることはもとより、その光量を測り、何度もボラを撮影して思い通りの仕上がりになるかどうかをチェックする、そんな必要があったからです。

さらに機材も消耗品も道具も高価。ストロボ撮影は、その意味でも、プロカメラマンしか立ち入ることのできない「聖域」でした。

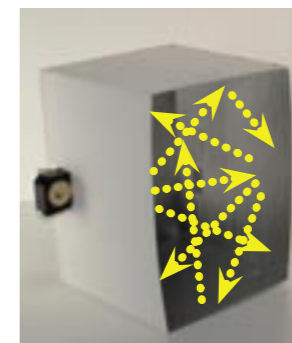
しかし、デジタルカメラ全盛になってストロボ撮影は大きく様変わりします。あらかじめ何度でも撮影結果を見ることができるデジタルカメラなら、光量を測ることも、ボラロイドに頼ることも不要。

カメラの液晶モニターで撮影した画像をチェックし、明るければ絞りを絞り、妙な影が出たら照明の位置を見直せばよいのです。

●新しいストロボの進化型

カメラが進化したのなら、ストロボ照明器具も進化すべきと、わたしたちは考えました。そのため提案のひとつが、このSTRO BOX。

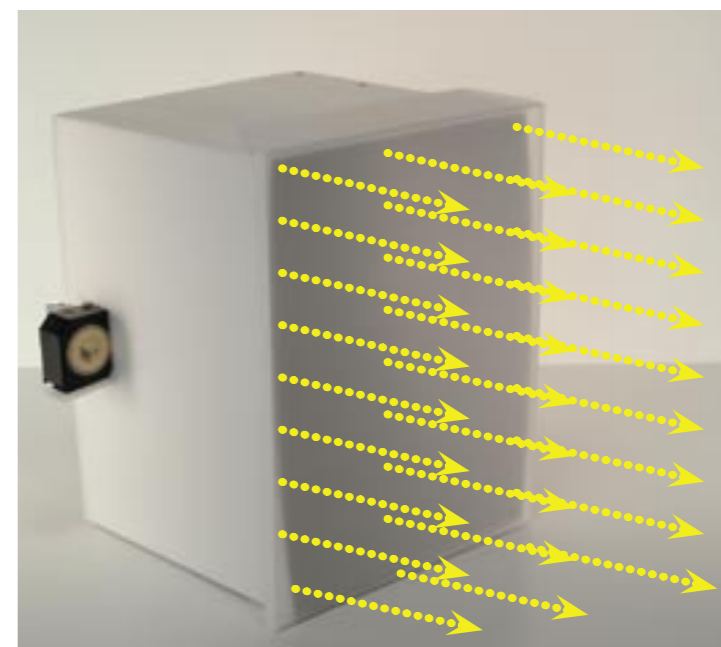
小型の発光部で作り出した光を、拡散して被写体にやさしく当てる。だからできた写真がきれい。むずかしいストロボ撮影を誰にでも簡単に、失敗なくできる。これこそ、わたしたちがSTRO BOXに込めた思いです。



適度な指向性が使いやすさの要

STRO BOXの内側には特殊な鏡面加工が施してあり、側面から発射されたストロボの光を内部で乱反射させます。乱反射した光は出口に集中しますが、そこに設けた特殊加工されたディフューザー（拡散板）によって柔らかな光へと変わります。

光には直進性が加えられますが、その性質は強くなく、適度に広がります。バンクストロボにありがちな鋭い指向性がないため、アンブレラのような手軽さでライティングが可能。むずかしいを簡単に、しています。



こんな欲しいを作っちゃった

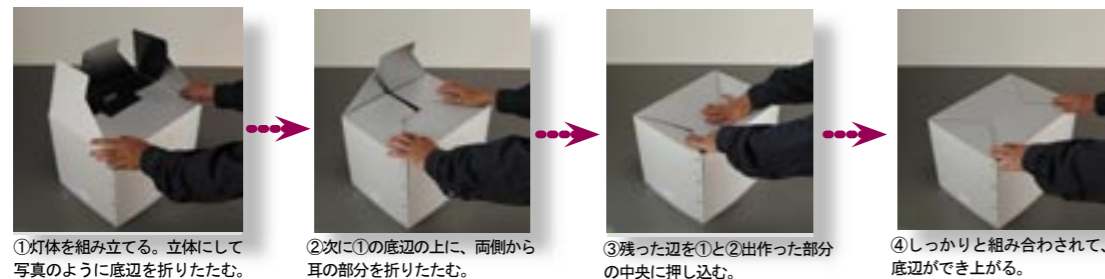
STROBOXはレイアウト・フリーの 広い発光面を持つ「バンク型単体ストロボ」。 スイッチを入れて配置すれば、 すぐに素晴らしい写真が撮影できます

均一な光質を安定的に提供できること、これがストロボという照明器具の持つ大きな特徴です。しかし、それ以上にストロボの存在

を魅力的にしているのは、それが持つ圧倒的な光のパワーでしょう。これこそストロボの「命」です。ところが、その最大の長所は、ス

トロボ撮影を難しくする理由にもなります。ストロボのパワーが災いして、影の強い、明暗差の激しい写真ができてしまうからです。

STROBOXを注文すると写真の箱型の灯体、ディフューザー（拡散板）、小型ストロボ、L字アングルのほか、パターンライティングの20ページの小冊子が同梱されてくる。



* 分解する場合は、④の中央を押し込み、上記と逆の順序を辿ること。無理をすると灯体が痛む可能性があります。

STROBOXの特徴

1. 組み立て簡単。必要な時出して、即座に撮影開始。
2. 接続コード不要。2灯3灯と簡単に増灯できる。
3. どこにでも置ける自由さと、わずか400gの軽さ。
4. 柔らかい光を生み出す、1200cm²の広い発光面。
5. 基本照明パターンを理解すればどんな撮影にも対応。

ストロボ撮影がうまく行かない理由は、撮影者がそのパワーを思い通りに制御できないからに他なりません。

そこで、わたしたちはストロボの光パワーを和らげ、ソフトな扱いやすい光線を得ることができないだろうかと考えました。

STROBOXでは、小型軽量のストロボを特殊な素材で作った箱に組み込んでいます。内部に発射された光は乱反射して、出口に集中します。その光の出口に拡散板をつけ、やわらかな光を得るのです。この面積は、大型のクリップオンストロボ

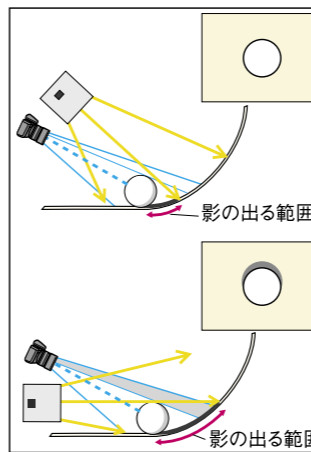
の発光面に対しておよそ50倍以上。柔らかさの秘密はこの拡散板の性質にあります。

その上、この単体ストロボは、カメラのストロボ発光に同調して光ります。だからシンクロコードは不要。そのため好きなところに置くことができるのです。

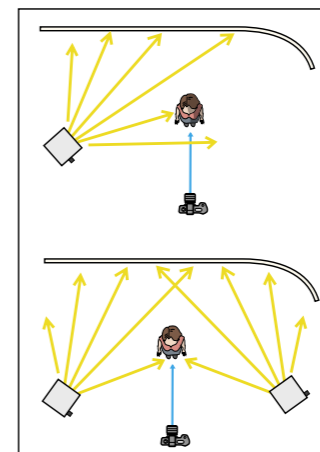
●どこにセットすれば良いか？

箱型なので積み重ねて使用することもできるSTROBOXですが、では、被写体に対してどこにセットすれば良いのでしょうか。

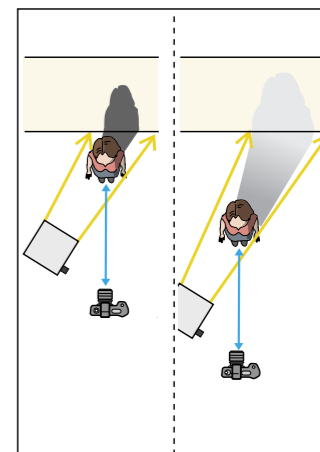
その答えが「パターン・ライティ



その1. 照明器具はレンズの光軸（撮像素子とレンズの中心、被写体を結ぶ線）より高いところに置けば被写体の影を目立たなくできる。反対に光軸の下に置けば、影は際立ってしまう。

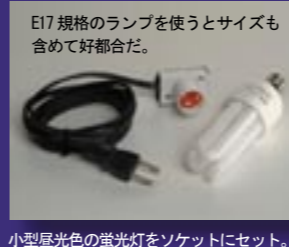


その2. 背景との距離を考える。背景に近づけば影は濃く、鋭くなるが、離れれば当然、薄くぼやける。単純なことから、これも重要なライティングの基礎知識だ。



その3. 照明はその芯を被写体に当てれば良いとは限らない。バランス上、背景により光量を割きたいとか、被写体に当る光をソフトにしたいなど、むしろ芯を外して照明するメリットもある。

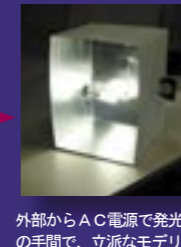
自作モデリングランプを仕込む



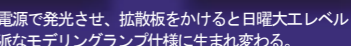
E17規格のランプを使うとサイズも含めて好都合だ。小型昼光色の蛍光灯をソケットにセット。



マジックテープで内部に設置。



外部からAC電源で発光させ、拡散板をかけると日曜大工レベルの手間で、立派なモデリングランプ仕様生まれ変わる。



カメラの内蔵ストロボが、STROBOXの発光をうながすスイッチの役割を果たす。だから、コードレス。だから、レイアウトフリー。置いた場所が、簡単に理想的な光源になる

カメラの内蔵ストロボのように発光面の小さなストロボは、ストロボ撮影をむずかしく感じさせます。暗い場所では、明るさこそ稼げますが、小さいなりにある光のパワーが災いして、ベタとした印象の写真を撮ってしまいます。

しかし、このカメラ内蔵ストロボはSTROBOX撮影では重要な役割を果たします。この内蔵ストロボの光は、STROBOXの「発光スイッチ」になるのです。STROBOXに付属している専用ストロボは、他機の発する光エネルギーを感じて自身も発光する「スレーブ・セ

ンサー」を持っています。

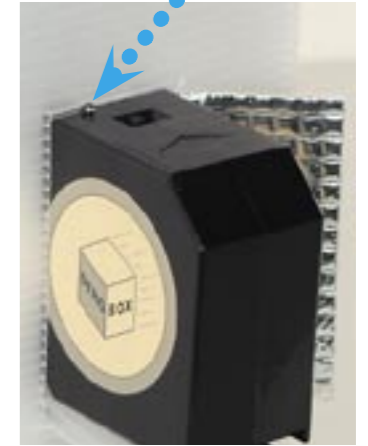
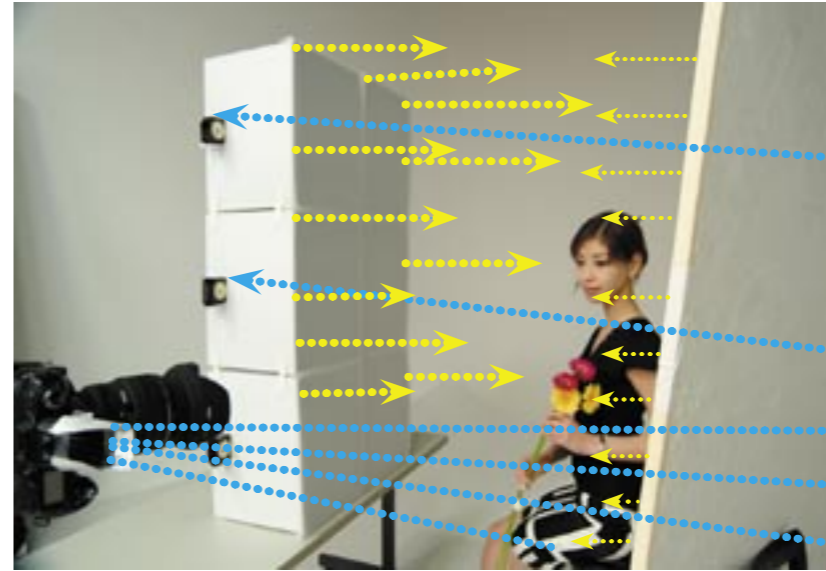
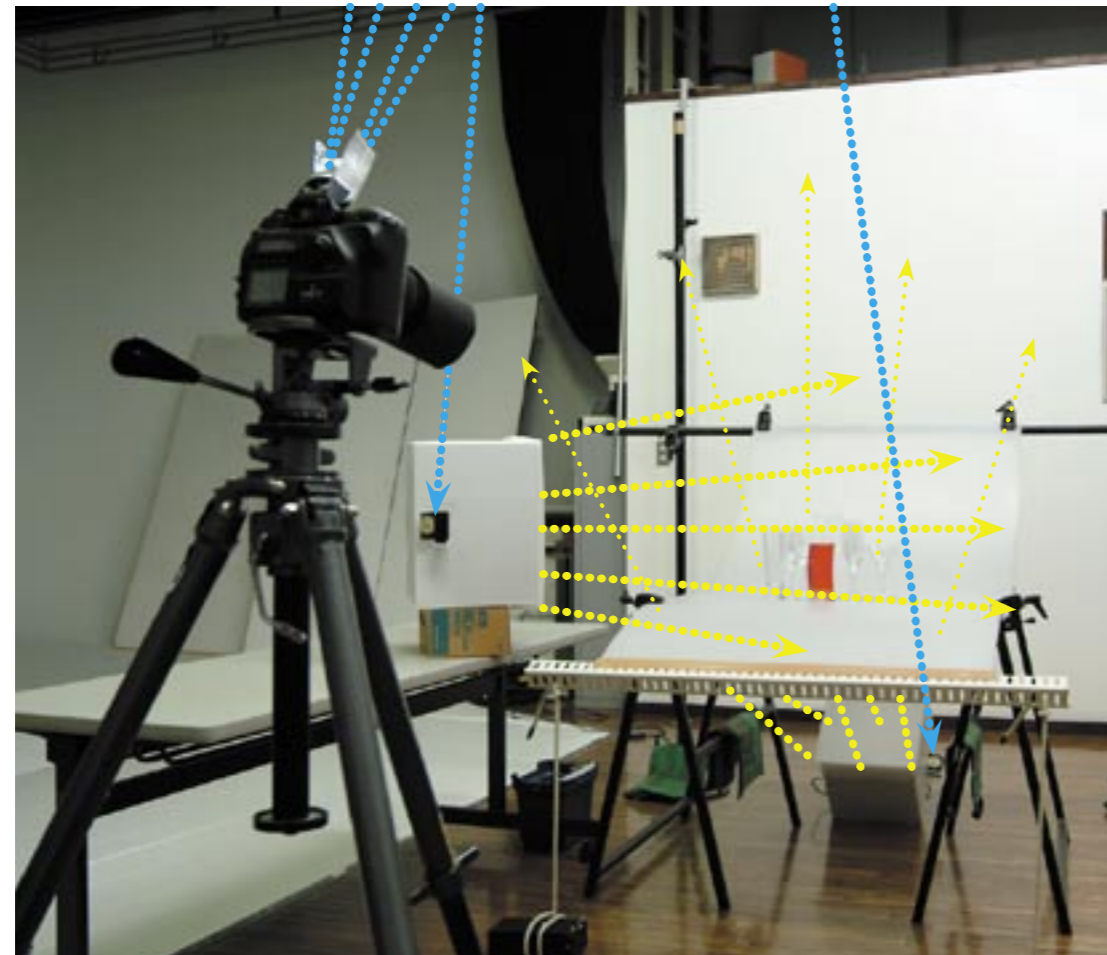
下に掲載した写真のように内蔵ストロボの光は、被写体に直接当たらないように付属の銀シートでカバーしますが、そこから漏れた光を利用して、STROBOXを発光させます。内蔵ストロボから漏れた光で、発光をうながす、これはいわば光通信。

この光通信によって、カメラのシャッターとSTROBOXは完全に同調するのです。STROBOXの電源を入れ、内蔵ストロボを上げて、シャッターを押せば、すぐに撮影ができます。

●フィルムカメラでもOK

また、STROBOXはフィルムカメラでも利用できます。クリップオンタイプのストロボを装着すればそれを同調発光のスイッチとして使うことができます。

カメラの撮影モードは「絞り優先」(Aモードなどメーカーによって呼称が異なります)が最適です。以降のライティング・パターンでは、その写真を撮る際のストロボ配置の他、感度200時のカメラの絞り値も掲載しました。その絞り値に合わせて、撮影をはじめてください。



STROBOX専用の小型ストロボ天面にある、この黒い突起が光を感じる大切なセンサー。ここを灯体の中に押し込まないように注意する。市販のスレーブセンサーつき類似ストロボはここには使えないので、注意してください。

STROBOXの価格は1セット 15,000円

(税・送料込みの値段です)

セット内容は、灯体、ディフューザー、専用小型ストロボ、単三電池2本、L字アングル、パターン・ライティング冊子、ストロボカバー。

初回限定100個のみ1台12,000円で提供します。(ただし、この初回限定セットはキヤノンEOS Kiss Digital など内蔵ストロボをマニュアル設定できないカメラには使えませんので、ご注意ください。また、初回限定品は数に限りがあり、お申し込み先着順となります。売り切れの際はご容赦をお願いします。)

ご注文の方法は、最後のページをご覧ください。

STROBOXは、プリ発光タイプのカメラにも対応していますが、多くの一眼レフタイプのデジタルカメラは内蔵ストロボのマニュアル設定が可能です。下のニコンD70もそ

んなカメラのひとつ。左の設定で内蔵ストロボをマニュアル設定にすれば、上の安い限定セットをお使いいただけます。内蔵ストロボをマニュアル設定できるならお買い得です。



内蔵ストロボのマニュアル設定法

Nikon D70の場合



①背面のメニューボタンを押すと、液晶モニターに表示が現われる。

②十字キーを使ってSETUPメニューのカスタムメニュー表示を選ぶ。

③初期設定のシンプルメニュー表示をアドバンスメニュー表示に切り換えて決定する。

④次に、カスタムメニューの19番「内蔵ストロボ発光」を選ぶ。

⑤初期設定のTTLモードをマニュアル発光モードに切り換える。

⑥発光量を任意に切り換える。これで内蔵ストロボはSTROBOXと同調するように設定できた。

「2灯」ほとんどの製品写真で応用が利く。ライティングの基本中の基本

オールマイティなライティング

実践的
効果的
配置
照明撮るものを選ばない全包囲的ライティング。
これを理解すれば、カタログ風写真への対応は万全

テーブル上に製品を乗せて撮影する分野をテーブルトップフォトと言いますが、その分野で、大きくライトを動かすことなくほとんどの被写体を撮影可能なオールマイティライティングがあります。背景素材に表面艶無し白や明るいグレーのメラミン化粧板を使うと、水にも強く、汚れず傷つかず何度でも使えてさらに、便利です。

テーブルトップの基本はトップライト（上から下へ照らす光）と、プレーンライト（斜め前方からの光）やサイドライト（側面からの光）を組み合わせた2灯の構成がベースとなります。

◇ライトをセットする工夫

プロの現場ではトップライトを、ブームスタンドという自由にライトの向きを変えることのできる専用スタンドを使います。

しかし、ストロボボックスは超軽量（400g）なので、傘立て兼用のコートハンガーや伸縮物干し棒を組み合わせた有り合わせの簡易ブームスタンドに布テープで吊るすだけで立派に目的を遂げることができます。

メインのプレーンライトはハイチェアにセットしていますが、有り合わせの段ボール箱等で高さを調節します。軽い四角い箱であるストロボボックスと、段ボール箱の間にスペーサーを噛ませれば角度を下向きにするなど朝飯前。セロテープ等の粘着テープで仮止めすれば安心です。ストロボボックス本体はプラスチック製ですから、テープの粘着物で表面が剥がれたり、損傷する心配はありません。

◇レフ板での受けと背景素材

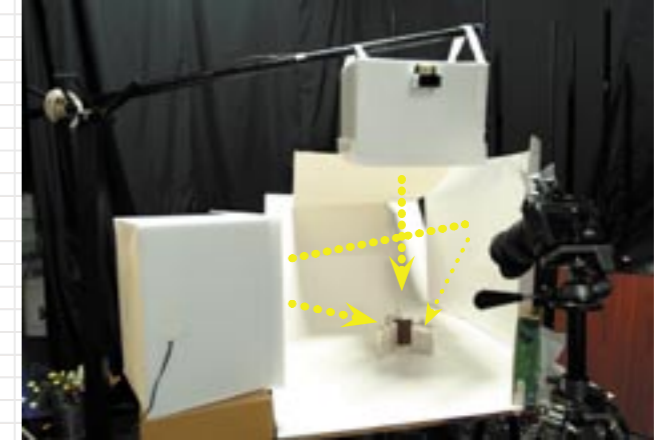
天面や光源の反対側からは、白ケント紙やイラストボードなどのレフ板を使用して光を回します。鏡や銀レフを使うと、より強く光を受けることができます。

ベースは建材店で購入できる白の艶消しメラミン化粧板を使用しています。後ろを緩やかに持ち上げておくと、無限背景（水平線）にすることができます。ちょっとした工夫で写真の出来が違って見えます。

背景を白バックにするか、グレー

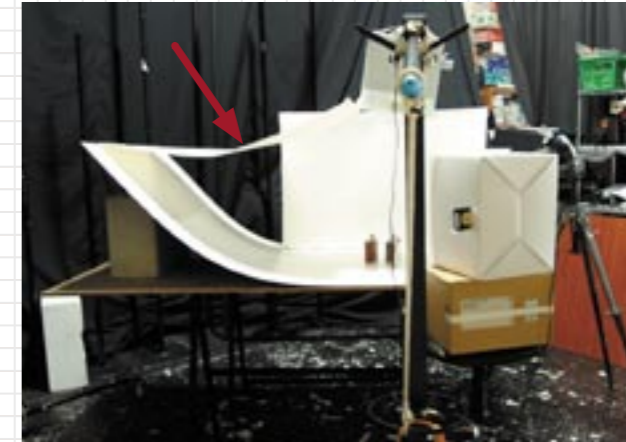
カメラの絞り値 f11
(ISO200)

カメラ側から撮影セットを見る



▲この撮影では、トップライトのセット方法が最大のポイントになるが、ペンダントライトのように天井から吊るす方法や、写真のように傘立て型ハンガーと伸縮物干し竿の組合せなど、工夫すればストロボボックスを釣る方法はいくつも見つかるはず。
左からイラストボードの上にセットしたプレーンライト（場違いによって後ろにスペーサーを入れて傾ける。右は白ケント紙で受ける）

撮影セットを側面から見る

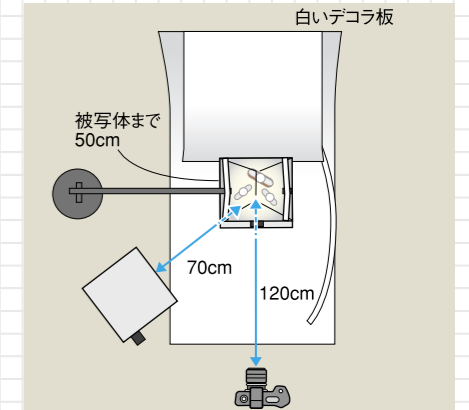


▲トップライトの後ろ側に白ケント紙を張って、被写体天面の映り込みを作っている（赤い矢印が差す場所。これをトレーシングペーパーに替えてもよい。ただし、その場合は天トレといって、全面に天井としてトレーシングペーパーや不織布を張り、その上からトップライトを照らす。プロの現場ではのやり方が常套）。
白レフで代用したカメラから見て右の受け（反射）は、左のライトと対向した位置にもう一灯ライトを足してももちろん良い。

バックにするか、黒バックにするかで、光の回り方が大きく異なりますので注意して下さい。

デジタル撮影では白バックがお勧め、下からのレフ代わりになりますので、光が良く回り形をはっきり再現、欠点は被写体への白の映り込みやフレアですが、撮影後コントラストを強めることで解消できます。が基本になっているのです。後は製品を置き換えてシャッターを押すだけでOK。これでほとんどの製品撮影に対応することができます。

照明の配置図



片光で創る印象的な光で人物撮影

カメラの絞り値 f 5.6
(ISO200)実践的
効果的
配置
照明STROBOXの発光面は人物に向けず、
反対側面に置いた反射板(白いレフ板)を狙います

印象的なポートレートを狭い室内で撮影しようとする、照明の都合で、どうしても半身からバストショットまでとアップになりがち。全身は無理としても7分身程度の、魅力的なボディラインを含めたポートレート写真を撮影するためには、どんな工夫が必要なのでしょう？

窓際から柔らかく差し込む光の中で撮影することを想像してみましょう。光が柔らかいのでフラットに当たると立体感も雰囲気も盛り上げることができません。

側面から近い片光で立体感を強調し、反対側は暗くなりすぎないように白レフで受け(反射)させれば良さそうです。バストショットならストロボボックス一台でも光量は充分ですが、7分身から全身になると光が回りきらず、光ムラができて寂しい感じになりがちです。

◇縦3台並びで全身撮影も可能

ぜひたくに縦に3台並べてみると全身でも充分光が回り、大きな照明光源とすることができます。

大きく均一な発光面をもつ照明器具の利点は、狭い部屋でも光源に被写体を近づけて撮影できる点にあります。逆に言えば小さな照明光源で全身を撮るためには、光源から被写体間に充分な距離をとる必要があるということです。

光源の反対側から受ける白レフ

は、全身用には180×90cm(36=サブロクと言います)厚さ15~20ミリくらいの発砲スチロール板が軽くて便利です。2枚を並列に白の布テープで固定しておくとし字状に自立し、倍の面積で光を回すことができるので理想的です。収納時は1枚分の面積に折り畳めますし。

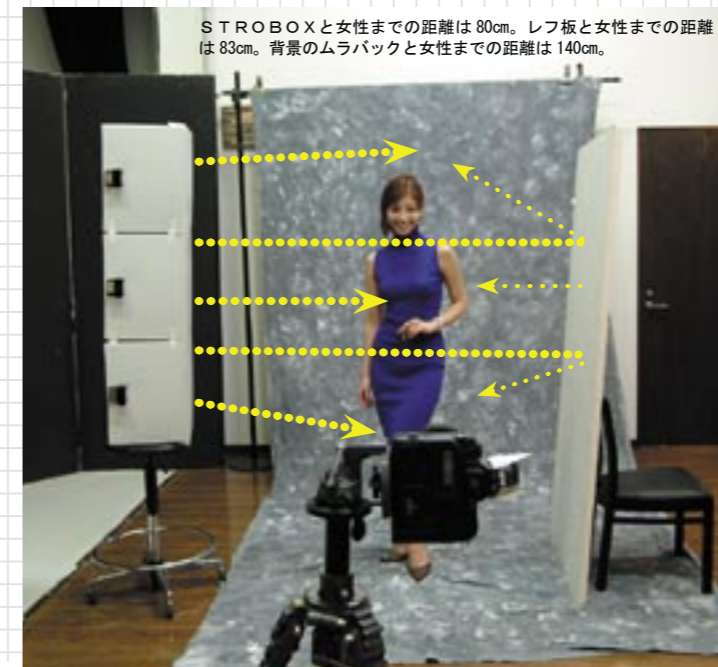
被写体から光源までの距離と等距離を基準に、被写体までの距離を前後してシャドー側の明るさを調節します。等距離で3絞り差前後(デジタル撮影の標準的な明度差は約2絞り)とちょっと硬めの、雰囲気優先ライティングとなり、レフ板を近づけるほどシャドーが明るくフラットになります。

◇ライトの向きも重要なポイント

ストロボボックスのセンターを右(レフ板側)に振ると被写体のコントラストが柔らかくなり、左(背景側)に振ると被写体のコントラストは硬くなり、背景が明るくなります。ライティングにおいてはライトの位置だけではなく、その向きも大きな



▲レフの反射光があるとはいえ、ライティングとしては片光といえる。そこで、このように顔の向きが変われば写真の印象もがらりと変わる。片光は陰影を伴うためボディラインなどの立体感はうまく表現できるが、表情のことを考えると、ポーズに制約のあるライティングでもあるだろう。



意味を持っているのです。特にレフ板が補助光源の代わりとして、重要な意味を持っているこのような場合は、レフ板に当たる光量が、主光源の向きで大きく変化するためです。

背景は写真用のバックドロップ(ムラバック)を使用していますが、勿論、壁をそのまま利用しても良いですし、カーテンや布、不織布などを利用して良いでしょう。煩雑な背景よりも無地やシンプルな背景が人物を引き立たせてくれます。

▼ストロボボックスはテーブルの上にセットしている。レフ板の発砲スチロールはイスにテープで固定している。人物の向きにもよるのだが、ライトの向きレフ板の位置と距離で、雰囲気は大きく変化する。デジタルカメラのメリットは撮ったその場で仕上がりが確認できることから、距離や向きといった設定を色々変えて試していただきたい。

透過光を活かした定番の照明法

「2灯」 乳白アクリル板越しの透過光が鍵となる



▲アクリル背後からの1灯ライティング。最もスタティック、端正な表現となる。後方からの1灯ライトだけでも十分に綺麗な写真を撮ることができる。



▲手前斜め横からハイライト表現用のストロボボックスを追加。くっきりとした四角いハイライトが入る。ちょっと嬉しい感じがする。



▲手前のストロボボックスの前にトレベを設置。ハイライトの形が広がって柔らかくなり、より自然な再現となっている。

カメラの絞り値 f6.7 (ISO200)

実践的配置 効果的照明

ガラスを乳白アクリル板の上に置き、下からの透過光と前面の1灯で撮り分けた印象の違いは？

2~3mm厚の乳白アクリル板を1枚用意しておく、撮影の幅と質が大幅に広がります。ガラス器など透明製品の撮影には必須ですし、切り抜き製品撮影にも威力を発揮します。また、それは柔らかな面光源を作るディフューザー（光の拡散板）としても優れています。

透過光を活かした定番ライティングはガラス器など透明製品の撮影です。半透明の乳白アクリルを1枚購入しておく、透過光ライティングを手軽に行うことができます。アクリル板背後からの照明を有効にするためには、日曜大工用品店等で販売されている馬（折畳みの自立脚）を1セット（2脚）利用します。木製や鉄製の物が入手可能です。アクリル板は2~3mm厚 110×130cm（定尺）もしくは3×6（90×180cm）程度のもので使いやすいでしょう。

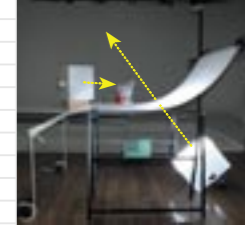
◇ horizont の役割

後ろは緩やかに持ち上げて固定し、水平線スタイルとします（地平線が出ないので奥行き感を曖昧にし、見る人の意識が被写体に集中します。切り抜きに近い効果といっても良いでしょう）。手前も緩やかに下側に曲げて逆水平線としておくと、手前のラインも出ませんので、限られた撮影台スペースを有効に活かすことができます。撮影時に背景が途切れない効果と同時に、曲げることで被写体を載せる部分の強度を上げる、一石二鳥の効果があります。

◇ 手前からのハイライトを作る

背後からの1灯照明でガラス器などは十分に美しく撮ることができ、表面の形を表現するためにハイライトを立てたほうがより完成度は高まります。ストロボボックスの前にトレベなどディフューザーを使ってハイライトの形を伸ばすことも人工的な雰囲気や和らげる効果があります。あまり手前のライトを強くしすぎると、折角の透明感が失われてしまいますので、手前の明るさは程々にしておきましょう。最大でも背後の露出と同等まで、透明感を活

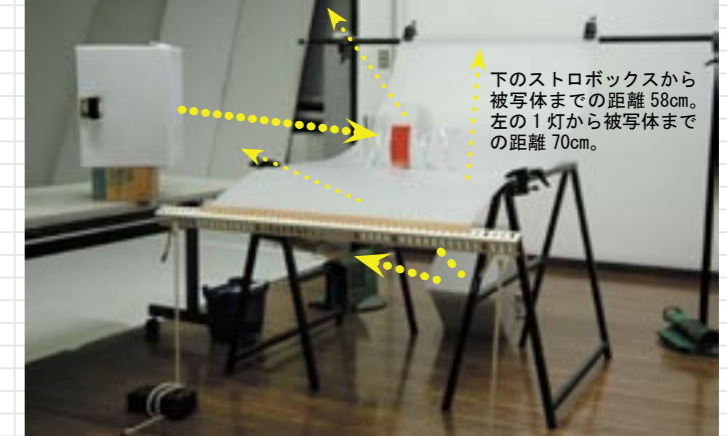
バックライトの位置



▲バックライトの位置で、透明感や立体感が微妙に変わる。作例では最もオーソドックスなレンズから見てセンターややや寄りにストロボボックスを配置した。ガラス器の真下から、もしくは真後ろから照明すると、また異なる味わいの表現となる。横方向にシフトするとまた違った表現を生む。

かすなら半絞りから一絞り暗めにしたほうが良いでしょう。この状態で被写体として不透明なものを加えても、手前のライトとの光量比によりませんが（不透明被写体が暗くならない範囲まで手前を明るくする）、きちんと写るはずで

ストロボボックス2灯の配置



下のストロボボックスから被写体までの距離58cm。左の1灯から被写体までの距離70cm。

▲左横からストロボボックスを加えることで、ガラス器の表面にハイライトを立てる。アクリル板は市販の馬（折畳み脚）2脚の上で固定。後ろをたてて自立させる。掛付けが面倒かもしれないが、このライトの位置なら、壁に立て掛けても良いでしょう。

斜め前から直接、発光させる



▲ストロボボックスを左から加えただけの2の作例のセット。場合によってはエッジの硬いハイライトが効を奏することもあるが、この作例ではガラス器の数が多いため、ハイライトが煩い感じになった。

斜め前のストロボボックス前にトレベを掛ける



▲ストロボボックス手前にトレベをセットして、ハイライト形を伸ばし柔らかくした左下の作例のセット。ハイライトが上品な感じになっている。トレベは80cm幅で2巻きのロールがその文具店でも入手可能（一番薄いのが使いやすい。150円程度）

シズルを伝える料理照明も応用の産物

料理ライティングの基礎知識

料理写真特有の「逆光気味」トップライトもテーブルトップ撮影の変形にすぎない



▲背後の半逆光ライトにアンバーの色ゼラチンフィルタ（ポリカラー）をかけて撮影。全体にアンバーがかぶっているが、トップライトと手前からの色出しライトで必要な色はきちんと出ている。



▲ノーマルな光で撮影。普通はこの状態が標準。半逆光のライトがかなり効いているのがお分かりだろう。これがシズル感や立体感、雰囲気を作り出しているのだ。

実践的照明効果的配置

トップを主光源にしながら不足部分を補い、色フィルターを使って温かさを「加味」しま

料理撮影はシズル感の表現が肝。トップライトがメインライトですが、レンブラントライト風の半逆光がシズル感を強調します。料理の色を出すためには、手前の起こしはレフ板ではなくライトを使ったほうが綺麗に再現されます。

料理撮影の定番ライティングです。レンブラントライト（半逆光）で湯気やシズル感、立体感を強調、美味しさを演出しています。トップライトもやや後ろから当てています。被写体によっては手前から起こしのライトをプラスするほうが、色が綺麗に再現されるので好ましいでしょう。その意味で白レフよりも銀レフや鏡で受けたほうが良い結果が得られます。

美味しそうな雰囲気優先させながら、色や形をきちんと出すことも必要と、料理写真は高度な技術を要求します。

手前からポンと1灯当てただけのライティングで、美味しそうに見えないのは当たり前なのです。

◇色ゼラチンの併用も効果的

温かい雰囲気を強調するために、レンブラントライトにアンバー色の色ゼラチン（ポリカラー）を付ける場合も少なくありません。朝の雰囲気を強調するためにブルー系の色ゼラチンを付ける場合もあります。

全体の雰囲気はそのような工夫で演出しますが、ほとんどの食材が記憶色によって表現されることを期待

されているので、色再現には神経を使う必要があります。手前からの色だしライトは必須になるでしょう。

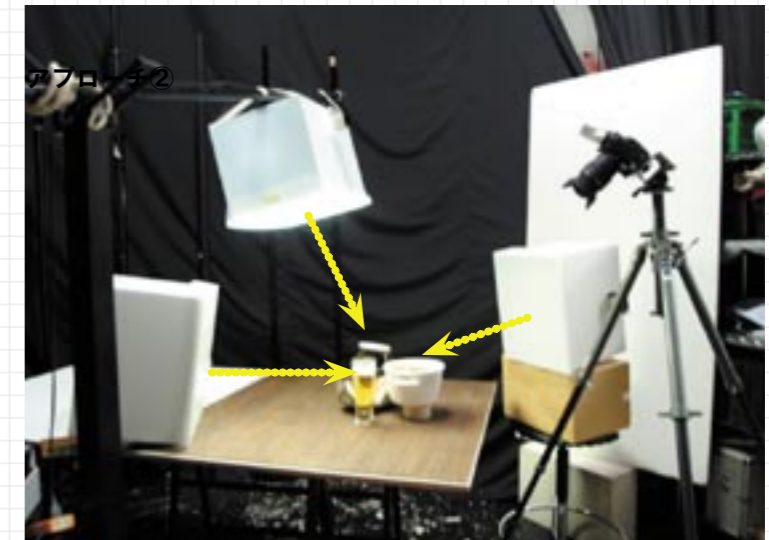
◇シズル感としての湯気の再現

温かい料理に湯気は付き物ですが、本当に撮影しようとする目に見えるようにはなかなか写るものではありません。連続して立ち上る湯気は時間軸として眼に写っていますが、瞬間光のストロボで写真として定着すると、その数千分の1秒間分の湯気しか記録されないため、

かすかにしか感じられないのです。背景が明るい場合はなおさらに強調されませんので、湯気撮影は背景を暗くが鉄則です。

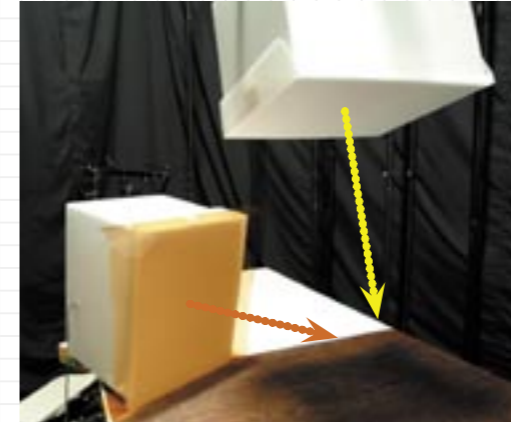
◇デジタルなら湯気も簡単！

デジタル撮影のメリットを活かして、ここは黒バックで完全な逆光ライティングで湯気だけを撮影しておきましょう。料理写真の上にレイヤーで重ねて描画モード「スクリーン」に指定するだけで、料理に盛大な湯気が演出できます。



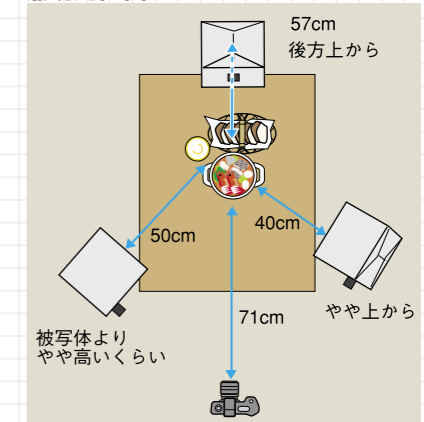
▲3灯の役割はこの状況を見るとよく分かる。通常のテーブルトップに比べ、トップライトがややリヤ（後ろ）に回っているのがわかるはずだ。

下の1灯にはアンバーのフィルターを掛けた



▲半逆光ライトにアンバーのフィルタ（色）をかけている状態。ストロボボックスはテーブルの上に置いてしまふので、このような条件では極めて使いやすい。

照明配置図



▲後方上からのトップライトがメインで、影ができるところを緩和するためカメラ側から1灯、画面奥からの光を演出するためのもう1灯を加えている。

作品に息吹を吹き込むライティング

立体オブジェのライティング

「受胎告知」という作品タイトルから連想したライティング



北見 隆「受胎告知」

実践的
効果的
照明
配置

芸術作品の記録は、感性を優先します。 作品のテーマや印象を写真に転写しようと考えます

単なる立体物複写なら、作品の形を正しく記録することが使命なのですが、アート作品の撮影では、「これが正しい撮影方法なのだ」とは言い切れないところがあります。作品から受けるイメージをどこまで再現できるかが、重要なポイントになるからです。

作品の撮影では、その形態形状によって製品撮影やポートレート撮影のテクニックを応用することができます。

また、作品の表情を演出するためには、ライティングの基礎である、プレーンライトやサイドライト、フットライト等の方向性の知識が役に立つでしょう。

材質感を再現するためには、直射光、反射光、拡散光などの光質の知識が応用できます。

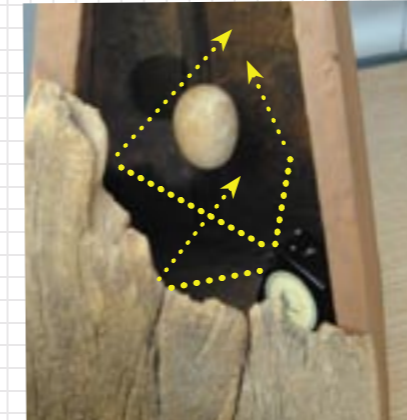
◇作品の印象を大切に照明する

単なる複写ライティングに終わることなく、作品のイメージを的確に写し取るためには、作品から受ける印象を大切に、それを再現するためのライティングを構築する必要があります。

この作品は、ストロボボックス2台を縦に重ねた高さとはほぼ同じくらいの高さがあり、顔の表情と古板のテクスチャ表現を目的に、比較的大きな面光源によるサイド気味の片方向ライティングを行なっています。

作品頂上に載る顔に対してはフットライト風なライティングとなります。作品に馴染むトーンに背景の濃

オブジェの中にストロボを仕込む



▲テーマが受胎告知。内蔵する卵がポイントになる。それを強調するために内部にストロボボックスのスレーブストロボ単体を仕込んでリモート発光している。実際は、ただ撮影するだけでこのストロボは発光するが。

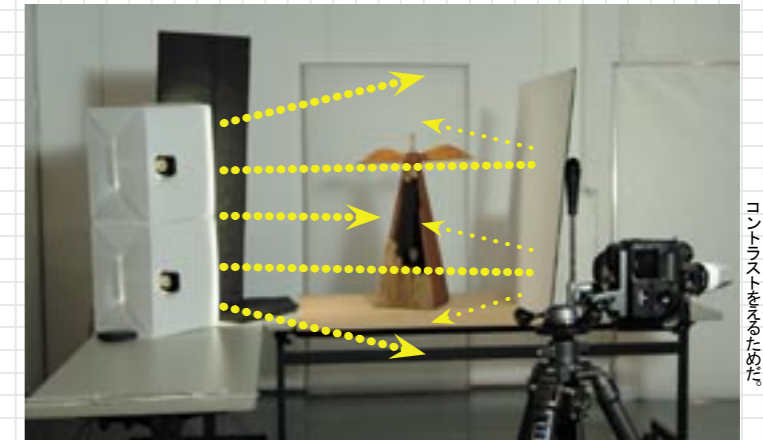
度が最適化するように、ライトの角度と距離を精密に調整しています。

◇ポートレートライティングと同じ

基本的にはポートレートライティングです。人物撮影の片光ライティングセットを被写体のサイズに合わせて一回り小さくしただけで行ってもよいセットで撮影しました。ここでは右側からのレフ板による受けを、かなり弱めにして写真にコントラストを付けています。

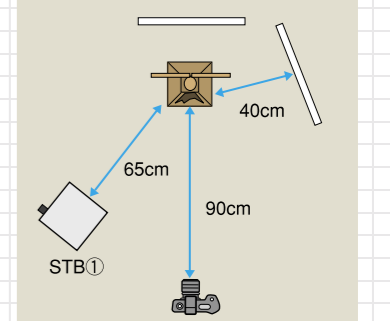
ライトの位置、角度によって作品の表情は大きく変化します。最適な位置を見つけるのに、デジタルカメ

カメラ側から照明の配置を見る



▲左から縦2灯のストロボボックス。右は白レフの受けだけ。サイドから光を当てる理由は、質感の描写とコントラストをえるためだ。

テープを貼って光量を落とす



▲ストロボボックスは縦に2灯重ねて使用。発光面はオブジェに正対するというより、むしろディフューザーに光の芯を向けるようにする。これは、光を回すテクニックのひとつ。

切抜き撮影が簡単にできる定石照明

ボトルライティングの基礎知識

ヌキの光(透過光)と、サイドライトが決め手を握る



商品の両脇を黒い紙ではさみ込み、その映り込みでボトルのシェープを強調する

実践的照明効果的配置

乳白アクリル板越しに、奥から透過光を1灯。側面の2灯は対向面に置いた白い反射板に向ける

昔、左のワインボトルのような切り抜き写真を作るには、文字通り原稿や製版フィルムを切り抜かなければなりませんでした。しかし、デジタル時代になって、簡単に切り抜けるようになり、むしろ濫用のきらいさえあります。さて、簡単といいながら切り抜きパスを作るのは熟練を要する作業。でも撮影時の簡単な心遣いで後作業も楽々という撮影法を紹介します。

切り抜き用のパスが簡単に切れるからといって、複雑な外形線やコントラストの低い画像のパス切りは、時間のかかるものです。同時に、正当なコストに反映できない製版現場の嫌われ者であることは、昔も今も変わっていません。

でも撮影時のちょっとした工夫で、パス切りが自動処理化できるようになり、後工程の省エネルギーに多に貢献できます。

ここで紹介する「キリヌキ写真を簡便にする撮影方法」は、自分で切り抜きをやる方もやらない方も、憶えておいて損のない撮影方法です。

◇ボトル単品の切り抜きカット
例として取り上げたのは典型的なボトル単品の切り抜き撮影セットです。アクリル板は水平セットではなく立てた状態です。

ボトルはワイングラスを逆さに置いた上に載せています。簡単で、身近なこうした工夫で、下のテーブルの写り込みを避けると同時にライティングをやりやすくしています。

またこれは、事後の切り抜き作業をやりやすくするために生まれた知恵でもあります。

◇ボトルの立体感は左右逆

ボトルの透過部分が綺麗にみえる位置にアクリルの背後のストロボボックスをセットします。

中身の入ったボトルはレンズ効果で明るさが左右逆転します。ボトルの向かって右側を明るくしたい場合は、向かって左側にライトを平行移動します。左側を明るくしたい場合は、逆の右側にライトを移動するわけです。

◇ボトルのエッジを強調する

アクリル板の背後から黒ケント紙を使用してボトルのエッジ部分を強調します(映り込ませる)。ここで、黒紙をアクリルの前からでなく、裏にセットする理由は、黒のエッジを柔らかく自然にしたいからです。

アクリルから数cm程度距離をとれば、より自然な柔らかなエッジになり、ボトルのシェープを美しく見せることができるでしょう。

ポジフィルムで撮影していた時代は、後工程での修整はあまり期待できませんでした。そこで、ボトルの表面肩に映り込むアクリルのハイライトをカットするために、上記の方法と併用して、黒紙をボトルの形

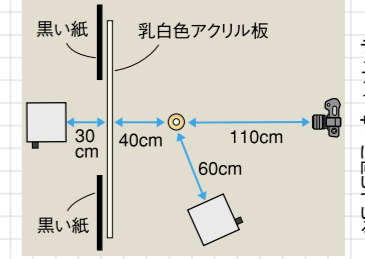
に切り抜いて、ボトルの側面直後にセットして、不要な光をカットしていました(離れた後方ではボトルの中に映り込む)。

デジタル処理、それもフォトショップなどで多くの人がその「キリヌキ」を簡単にできるようになったのは、隔世の感があります。

◇ラベルとハイライトを立てる

手前のラベルが綺麗に写るような位置にもう一灯のストロボボックスを配置しますが、ボトルの形状からハイライトを縦に伸ばすためにもう一灯、上に追加しています。

ラベルの金の部分はストロボボックスの照明で明るくするのではなく(直接光では露出オーバーで飛んでしまうので)手前から白ケント紙で受け(反射)して穏やかに明度をアップしています。



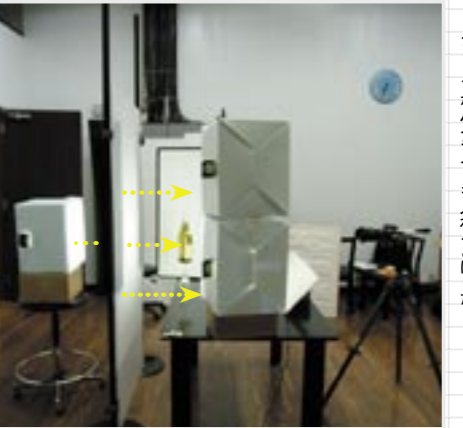
▲メインは背景からアクリル越しに来る光。向かって左からの2灯はボトルと対向位置にある。ディフューザーに向いている。

アプローチ③

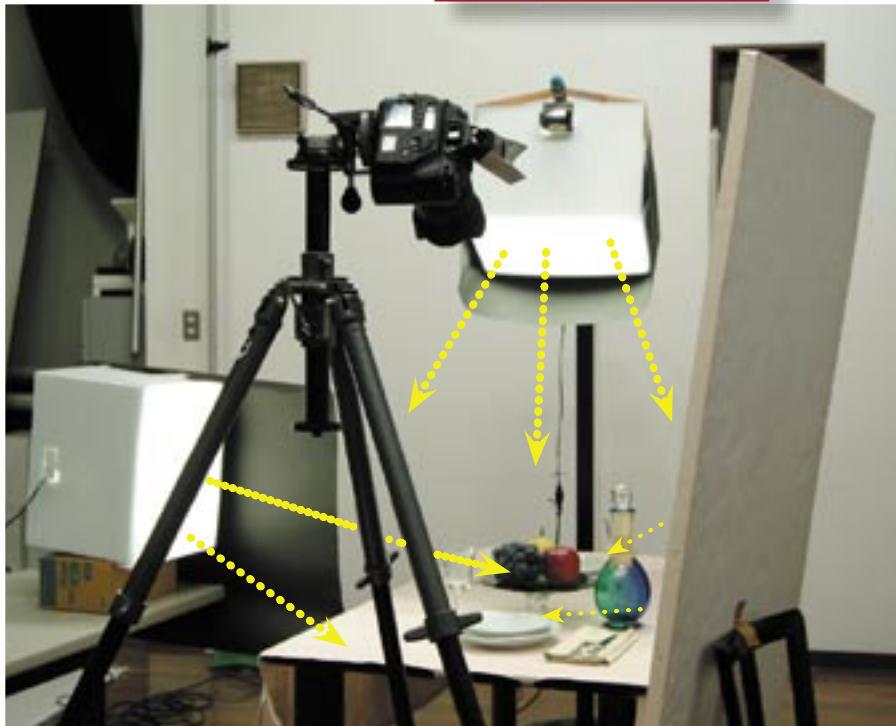


▲乳白アクリル板は立てた状態をセットした。ボトルの透過部分アクリル板の上作られているわけだ。アクリル板との距離が重要になってくる。ライトをセットしてからボトルを前後してみれば、最適な位置が確認できる。

アプローチ④



▲ハイライトを立てるためのストロボボックスは1台では大きさが足りず、2台縦に並べてクリアした。手前トレペを垂らせば上側のハイライトはつながるが、これはシャッターなハイライトを入れることにした。



▲ストロボボックスは、本来、点光源に近い光質を持つ単体ストロボの光を、拡散させ、柔らかくすることで、写真撮影において「使いやすい光」を作り出す目的で開発されました。やさしく柔らかな拡散照明光を、簡単に得るための答えが、ストロボボックスなのです。

明します。勿論両サイドから（もしくは片側から）白レフ板で光を回す必要はあります。もう一灯反対側から照明して、手前からの（光の）起こしの補助光2灯で照明してもよいでしょう。

◇多灯トップライトも常識

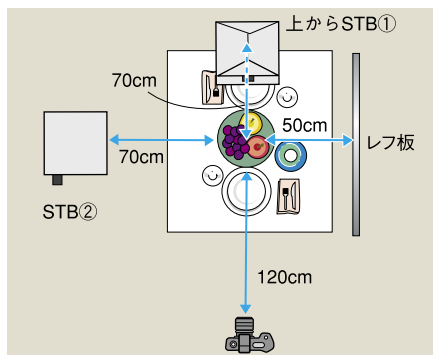
テーブルの面積が大きい場合は天面に大きくトレペや白布（不織布が安くて便利）を張って、ストロボボックスを複数

個トップライトとして使用してもよいでしょう。

スタジオ撮影ではスカイライトと言っていますが、天井から多数のライトを吊るして、紗幕（スタジオ一杯のディフューズ用布）で天空光に近い環境を作りますが、そのミニチュア版というわけです。

◇ベーシックライトとの違い

製品撮影用ベーシックライティングと使用灯数もセットも全く同じですが、トップライトがメインライトとして機能しているのが大きな違いです。手前からのライトは、被写体の手前サイドを明るく、色を正しく出すために使われています。



▲ストロボボックスはわずか400gという軽さのため、高価で大型の写真用本格機材を用いなくてもセッティングが済むのが大きな特徴のひとつ。今回の撮影では、そうした機材をあえて使わず、椅子や物干し竿などを組み合わせ、また、テーブル等の簡易接着素材を使って誰にでもできる撮影環境を作っています。家庭内にある身近な道具で、本格的な写真を撮る。これがストロボボックスが目指したテーマです。

ダイニングテーブルの照明はペンダントライトなど、天井からテーブルに吊り下げたトップライトか、天井光のルーフライトというのが一般的です。撮影の場合も例外を除いて同様にトップライトがメインライトとなります。ポートレート撮影でメインライトとなる斜め上からのプレーンライトは、補助光として使うことになります。

◇天トレの使用率は高い

影を柔らかくする場合や光り物でハイライトを伸ばげ、ぼかしたい場合などは、天面にトレペなどのディフューザーを張って（天トレと称します）、その上からトップライトを照

STROBOXのご購入方法について



STROBOX 1セット 15,000円 (税・送料込み)

STROBOX 2セット 28,000円 (税・送料込み)

STROBOX 3セット 42,000円 (税・送料込み)

STROBOXは(株)玄光社の通信販売商品です。ご注文、お問い合わせは、小社・営業部
TEL 03-3263-3515 Fax 03-3263-3045 または、<http://www.genkosha.co.jp>までお願いします。
〒102-8716 東京都千代田区飯田橋 4-1-5 (株)玄光社 営業部「ストロボボックス」係